

雨に苦しむⁱ

伏園兄：

北京はこのところ雨が多く、君は長安道上でも雨に遇っているかどうか知りませんが、思うにきっと旅の趣を増していることでしょう。雨中の旅は必ずしも愉快だとは限りません。わたしは以前杭州・上海間の列車でよく雨に遇い、いつも困難を感じました。だから汽車での雨には何の興味も感じません。だが黒篷船に横になって静かに篷を打つ雨音を、それに加えてぎいーぎいーと鳴る櫓の音、さらに「岸によるぞ一、よって一よって一」という掛け声を聴くのは、一種夢にも似た詩境であります。もしもう少し大胆になれば、足こぎ船に仰向けに寝て、雨を冒して夜行すれば、もっと水郷の住民の風趣というものが明らかになります。ちょっと危険で、不注意に、寝返りを打ったりすると、たちまち船底を天に向けることになりますけれども。二十年余り前東浦に先父の保母の葬儀に行ったことがあります。帰りに暴風雨に遭い、一葉の扁舟は白い鷺鳥のような波浪の中を大樹港に滑り込みましたが、危険極まりなく愉快も極まりなかった。わたしにはたぶんまだ相当「魚であった」時の——少なくとも断髪文身の頃の癖があるのでしょうか。水に対してすこぶる親近感を持っています。でも北京の泥の池のような多くの「海」には実に不満であります。このような水はなくても何の惜しいことがあります。君は「陝半天」ⁱⁱに行くには二日ばかり準砂漠の道を歩かねばならないようですが、その時もし風雨に遇ったら、多分とても気持ちがいいでしょう。遥かに思うに君は驟馬が曳く車にあぐらをかいて、砂漠を、大雨の中を、四ダースの内のサイダーを飲みつつ悠然と進むのは、「亦快ならずや」の一つということになるでしょう。だがこれはわたしの空想でしかなく、詩人の理想と同じく当てにはなりません。あるいは君は驟馬の車で雨に遇い、とても困惑して、ちょうど毎日悲鳴を上げているところかもしれません。これは君が北京に帰ってきてから訊くことにしましょう。

わたしは北京で、この何日かの雨に遇い、ずいぶん難儀をしました。北京はもともと雨が少ないので、雨具が完全でないばかりか、家屋の構造にしても、雨を防ぐには周到さが欠けています。ほんとうの金持ち以外は、煉瓦塀は滅多になく、大抵は泥壁に漆喰を塗ってそれでお終いです。近頃は天気がよく変わり、南方では酷寒、北方では長雨、そのため両方で建築上の欠陥が露わです。一週間前の雨では裏庭の西の壁が崩れ、二日目には「梁上の君子」が北の部屋の金網の窓を伺いにお出まし、次の日から急いで七、八人の職人を呼んで、二日ばかりで、始めっから作り直し、十中の八九は完成して、なんとか高枕で寝られると思ったら、前夜の雨で又門口の南の壁が二三丈にわたって崩されました。今回びくついたのはわたしではありません。川島君「あの人たち」二人です。というのは「梁上の君子」がまたも御光臨遊ばして、きっと「あの人たち」の窓の下に隠れて盗み聞きをしたのでしょう。「あの人たち」の不安を解消するために、晴れるのを待って、急いで大挙して修築しなければなりません。あまり長くないよう願っています。ここしばらくは川島君の弟さんに頼んで御苦労ながら警護役をやってもらおうしかありません。

一昨日は一晩たっぷりの雨が降り、夜中に何度目が覚めたかしれません。北京は時たま誰かが

ご機嫌で爆竹をいくつかぶっ放す以外は、夜は総じてまだ安静なのですが、ああしたバラバラという雨音だけはわたしの耳はあまり聞きなれず、だからしょっちゅう目が覚めるのです。眠っていてもまるで耳に麵のようなものが粘りついている感じで、寝ていてとても不愉快です。もう一つ、一昨日の晩には子供たちの報告によると、表の庭の溜り水がすでに階段から一寸も離れていないということでしたので、夜中に雨音を聞きながら、心では何がなし水はもう階段まで来て、西側の書齋にまで入ったのではないかと思ってしまうのです。やっとの事で朝の五時になって、裸足で傘をさし、西の部屋に駆けつけたところ、果たして思っていた通り、部屋中水浸し、一寸ほどの深さがありました。これで何とか一息嘆息をつくやら、安心するやらでした。もしこんなにいそいそと駆けつけたのに、水がなかったら、恐らくその時は却って失望し、今のこのような満足はなかったかもしれません。幸い書物は全て濡れませんでした。何も値打ちのあるものはありませんが、湿って一つ一つ紙の餅になると、やはりとても不愉快です。今では水はすでに引きましたが、まだ大水が来た後のよくある臭気が残っていて、もちろんお客と座談はできず、自分でもそこで物を書くことはできません。だからこの手紙は裏のオンドルの上の小机で書いています。

今度の大雨では、二種の人間が喜んだだけです。第一は子どもたちです。彼らは水が好きですが、なかなかお目にかかれません。いま庭中が川になったのを見て、群れをなして「川流れ」をやりました。裸足で水の中に入るのは、実はかなり冷たいのですが、彼らは恐れず、水に入ったままなかなか上がろうとしません。大人は子どもたちが面白そうに遊ぶのを見て、一人二人と加わりましたが、成績はあまり芳しからず、その日のうちに滑って転んだのが三人、そのうち二人が大人でした。——その一人はわたしの弟で、一人は川島君でした。第二に雨降りを喜ぶのはカエルです。以前子どもたちと高亮橋まで魚釣りに行って釣れなくて、かなりのカエルを捕まえたのですが、緑のやつ、縞模様のあるやつなど、持って帰って皆庭に放しました。ふだんは偶に何声か鳴くだけですが、ここ数日は一日中鳴きわめいています。ことによると不作の兆かもしれませんが、とても田園の風味があります。耳たぶの皮が柔らかい人は多くは、とても喧騒を憎み、雀、カエルやセミの鳴き声など、およそ彼らのうまいを妨害するに足るものは、なんでも痛烈に憎悪して関係を断ち、大いにこれを滅して昼寝せんという意気込みがありますが、わたしはそこまでしなくともよいように思います。ありのままに聴けば皆とても面白く、これらは長らく詩の材料となってきただけでなく、すべての鳴き声は実際聴くに耐えるものです。カエルは田んぼで群れをなして鳴き、深夜に静聴すると、往々にして一種の金属音になるのは、とても特別です。また時にはまるで犬の鳴き声です。古人がよくカエルやハマグリを吠えると言ったのは、たぶん実際の経験から来たのでしょう。わたしたちの庭のカエルは今はただ縞模様のある一種しか見えません。その鳴き声はむろん美しくはなく、ただがががという鳴き方で、革〔ge〕の音と言えます。ふだんは一声から三声で、それ以上はありませんが、ただ雨が降った朝には、一気に十二、三まで鳴き、実にどんなに喜んでいいるかが分かるというものです。

この大雨は恐らく田舎の貧乏な友人には大きな不幸でしょうが、わたしは今までこの目で見たことがありません。単に想像によるだけでは役に立ちませんから、身につまされないのに代って

悲嘆することはしません。もし誰かがここに記されたのは個人の事であって、人生にとって無益だと言う人があれば、わたしも認めます。わたしはもともと個人の私事を言いたいだけで、そのほかに別に考えはありません。今日はお日様も出てきましたし、夕方には外に遊びに行けるでしょう。この手紙もこれでお終いです。

わたしはもともとあなたの秦遊記を待っていたのですが、いま自分の方から先にあなたに書き送りました。これも「意表の外」の事になるでしょう。民国十三年七月十七日、京城にて書す。

※初出：1924年7月22日『晨报副刊』

ⁱ この一文が周作人の室号の一つ「苦雨齋」の由来となった。

ⁱⁱ 「陝半天」 松枝茂夫氏訳『周作人随筆集』の注に「“陝半天” “陝西は遠い” といふ意味の俗語」とある。天空の半分もの遠さということか。